

新作能『六条』構想

王藤内 雅 子

某機関より「源氏物語」を題材にした新作能を書いてほしい」という依頼を受けました。自信は有りませんが、書いてみようと思えます。今は構想を練っている段階なので、本稿では、台本（謡の文句）の詳細は記さず、〔登場人物〕〔劇構成〕〔テーマ〕〔言語〕程度の構想のみを記します。

* * *

〔登場人物〕

シテ……六条御息所の亡霊

ツレ……或る女（若くはない女）

ワキを出さないのが眼目である。ワキの役目（シテを舞台に導き出す役目・シテと問答しシテに〈語り〉を促す役目）は、ツレに担当させる。ツレは『源氏物語』の愛読者であるが、『源氏物語』に描かれている女君の中で六条御息所を最も好む女。非常に鋭敏な感性の持ち主。だから、使用能面は「十寸髪」とする。

六条御息所は、前皇太子妃。皇太子没後、六条辺の実家に下つてから光源氏との愛が始まった。研ぎ澄まされた感性の持ち主で、源氏にとつて理想の女性であった。しかし、源氏は、このひとの心の深さに息が詰まりそうでもあった。段々と源氏の足は遠のきつつあったが、或る事件によつて源氏から完全に疎まれ（『源氏物語』葵の巻）、源氏との愛を諦

め、都を捨て、伊勢斎宮に選ばれた娘と共に伊勢へ下向してしまつた（『源氏物語』賢木の巻）のである。使用能面は「泥眼」とする。

〔劇構成〕

形式……単式夢幻能

情景……或る女の書斎。某年某月某日の深更。

〔1〕 ツレの登場

巻物（『源氏物語』のつもり）一巻を携えて登場する。常座で「私は『源氏物語』を毎日読んでいます。私は六条御息所が最も好きなので、今夜は夕顔の巻を読もうと思います。」と名のり、ワキ座に着座。巻物を広げる。

〔2〕 シテの登場

笛の音に導かれるようにして、長い橋掛りを静かに歩み、ひっそりと登場する。（小鼓・大鼓は音を発さない。笛は、これ以上ひそかな音は無い位の、観客の心に染み入るような音で吹く。）

シテは常座で「のうのう」とツレに呼び掛ける。この〈呼び掛け〉と同時に、舞台は非現実の世界と成る。

〔3〕 シテとツレの問答

呼び掛けられたツレは振り向き、シテと対座。

「どうして夕顔の巻を読んでいるのか」というシテの問い掛けて、

〈問答〉開始。

ツレ「夕顔という女が嫌いだからです」シテ「嫌いな夕顔が主役の夕顔の巻を、なぜ読むのか」ツレ「源氏との愛の最中に頓死してしまふでしよ。物怪に取り殺されてしまふでしよ。あの場面が好きなのです」などと問答。

「おっとりとした性格はまだ良しとしても、素直なだけ、従順なだけ、

控えめなだけ、何でもすぐ怖がる、可愛い女。あんな女は大嫌い。わたしが好きなのは六条御息所。あのシンドイ性格が好きでたまらない」というツレの言葉に感応し、シテは自分の正体を明かしてしまふ。

[4] シテの語り

源氏の君とは文学を語り愛を語り、それはそれは愉しく濃密な時間を共にしました。わたくしたちは「打てば響く」を絵に描いたような二人でした。

わたくしは普通の女であったのに、あのかたを愛し始めてから、感覚が異常に鋭く冴えてきたのが、自分でも分かりました。愛し過ぎたのがいけなかったのだろうか。魂が身を離れて、あのかたの周辺を彷徨っていると感じることもありました。

あのかたは、よりにもよって六条辺のわたくしの所へ忍んで通っていらつしやる折に、五条辺の夕顔という女を見初め、夢中に成ってしまった。わたくしには目もくれず。そればかりか、その素直なだけ、従順なだけ、控えめなだけ、何でもすぐ怖がる女が可愛くて、わたくしの性格と比較なさったのです。

その瞬間の妬さ口惜しさ。非常な絶望感から、わたくしは物怪と変じ、二人が寄り添い臥している枕上に現われ出たのです。そして、「こんな何の取柄も無い女のどこが良いのですか。わたくしが、この上なく素晴らしいかたと、お慕いしているあなたなのに」と訴えたのです。そして、あの女を取り殺してしまつた。

[5] 舞事

舞は、シテとツレの相舞とする。

はじめはシテ一人だが、シテを慕うようにしてツレも立ち、舞う。感応し合った二人が悲しみを共有するつもりで舞う。テンポは、ゆったりゆったり、(序ノ舞)風のもが良い。しかし、途中から再

びシテ一人の舞に戻る。これは強い感情を表現したので、(カケリ)風のもが良い。

[6] 結末

シテが舞い終えると謡(地謡)少しあり、シテは静かに退場。シテを慕うように、ツレも静かに退場。(退場の際にも、できれば笛の音が欲しい。)

[テーマ]

愛しているのに怨めしい、怨めしいのに愛しい。そういう人間の切なさ哀しさを描きたい。

[言語]

台本を古典語で書くか現代語で書くか、模索中。

能は、演劇であるばかりではなく、楽劇でもある。音楽を作る仕事、つまり楽譜作成(台本の節付け・囃子の手組み)は役者に託す事に成る。現代に生きる私が書くのだから現代語で——は、私の長年の夢である。しかし、現代語による台本に対する役者側の拒絶反応は、充分に予想される。現代語による台本と付き合おうというパートナーが現われない限り、能『六条』の舞台化は不可能であろう。以上